

フリジア語保護活動から考えるマイノリティ言語保存への取り組み

政策科学科 4年 平崎 大智

研究目的

本プロジェクトでは、近年のマイノリティ問題への関心の高まりから、少数言語保護に注目して研究を進めた。1992年に欧州地域少数言語憲章で、私的な場と公的な場において、少数言語と、その話者が保護および推進されることが決定された。また、1996年にはユネスコ世界言語危機地図アトラス・リストの初版が出版された。この報告書によると世界には7000の言語が存在し、そのうちの2500の言語が消滅の危機にあるとされている。このような少数言語に対する問題意識の高まりは、ドイツで顕著である。ドイツ連邦政府は1992年に欧州地域少数言語憲章に署名した。これによりドイツにおけるデンマーク少数言語、北フリジア語、ザーターフリジア語、低地・高地ソルブ語やロマン語などがドイツ国内で保護されるべき少数言語として認定された。このことがきっかけとなり、1995年に欧州評議会による国家マイノリティ保護の枠組み条約にも署名した。また、数年ごとにドイツ連邦政府と各自治体は、国内のマイノリティに関する報告書を作成している。これらのドイツの少数言語保護の活動から、どのような取り組みを行えば少数言語話者の数を維持することが出来るのかと考えた。そこで、注目したのがドイツの少数言語の一つである北フリジア語である。なぜならば、北フリジア語は学校の正規の授業科目として教育が行われているからである。このように、本プロジェクトではフリジア語教育を例として、どのようにして少数言語教育が少数言語保護に貢献しているのかを検討した。

結論

フリジア語担当教師のインタビュー調査を分析していく中で、フリジア語保護においてフリジア語授業は、さほど重要でないものであるということが明らかになった。しかし、フリジア語話者の70%以上が非ネイティブ（フリジア語を第一言語していない人々）であり、彼らにフリジア語を学ばせることができる環境を提供するという面でフリジア語は必要である。また、Prestige（言語の社会的地位）を高めることで少数言語保護に繋がるということが分かり、それにおいてフリジア語教育が必要である。

活動内容

本プロジェクトでは、北フリジア語教育の実態を調査するために、ドイツ北部のシュレスビヒホルシュタイン州にあるフェール島とアムルム島を訪問し、現地でフリジア語授業を実施している学校を訪問した。そして、授業見学、学生にアンケート調査とフリジア語担当教師にインタビュー調査を実施した。



写真：フリジア語授業の様子